

震災後の日本における福音主義神学の教理的課題

関野祐二

I. 序

2011年3月11日に発生した東日本大震災と、津波により全電源を喪失した結果起こった東京電力福島第一原子力発電所のメルトダウン事故は、広範囲に甚大な被害をもたらすとともに、我々「聖書はすべて誤りなき神のことば」との聖書信仰を標榜する福音派教会に対し、もはや避けては通れぬ諸課題をも突きつけた。福音派諸団体や諸教会による被災地の救援と復興支援では迅速かつ愛のこもった息の長い活動が継続され、社会から一定の評価もなされている一方、自然災害と神のさばきの関連性、神義論、メインラインやカトリックあるいは他宗教との援助協力、死者儀礼の問題、救援活動とみことばによる伝道との関係性や優先性、原発事故により表面化した科学と科学技術の功罪、キリスト教信仰と科学との関係性、経済活動も絡む原発再稼働の是非や環境問題など、聖書からどう答え、どのように考えたらよいのか、三年半が経過した今でも、十分な神学的議論や考察が復興支援ほどには進んでいないのが現状である。

その原因をたぐってみると、聖書信仰を共有する福音派教会が、1974年のローザンヌ誓約における「伝道と社会的責任」との宣教定義以来、従来からの精力的伝道活動に加えて、聖書に基づく社会的活動を積極的に推進しつつも、端的に言えば「聖書信仰と社会的活動の関係性」についての議論や考察を十分には行って来ず、神学的深まりに欠けていたからではないか¹。聖書を誤りなき神

¹ この点に関し、日本の福音派内で早くから問題の重要性に気づき、論じた書は以

のことば、信仰と生活の唯一絶対の規範と告白することが、「福音とは何か」という根本的問いかけによる福音理解の深化と相まって、どのような聖書の行動を生み出し、社会的責任を果たすわざに結びつくのか。

近年、「包括的福音 (Holistic Gospel)」「包括的宣教 (Holistic Mission)」ということばを度々耳にするようになった。前者は、従来の福音理解が「魂の救い」に特化され過ぎ、相対的にこの地上でのわざが軽視されて、聖俗二元論化された悲観的終末論に陥って来たことへの反省から、本来の福音理解を回復しようとの試みである。後者はまさに東日本大震災被災地の現場で福音派諸教会が問われたテーマであり、2013年12月発行『福音主義神学』第44号のタイトルは、「ホリスティックな宣教——東日本大震災が投げかけるもの——」であった。両者に共通するのは、神の民としての我々が今、この地上でいかにして真の福音に生かされ、聖書の宣教を推し進めるかの問題提起であり、そのベースとなる福音主義神学の中心点をあらためて確認かつ共有し、震災後の福音派アイデンティティを再構築することが求められていると言えよう。

II. 東日本大震災が残した福音主義の神学課題

1. 「自然」理解と組織神学的位置づけ ～自然災害は罪の結果か～

「自然」という用語は聖書にない一般名詞だが、現代では主に大自然、自然界など、我々人間を取り巻く環境全体を包括的に示す概念を意味する²。しかし従来、福音派にとっては、「自然」ということばが、ふたつの理由で否定的な印象をもたらして来たのも事実である。ひとつは、一般啓示の価値をめぐるバルトとブルナーの自然神学論争³、もうひとつは自然界に存在する生物の成り立ちを説明する進化論 (生物進化学)、および宇宙の始まりと歴史を百億年オーダ

下。後藤敏夫『改訂新版 終末を生きる神の民』(いのちのことば社、2007年。初版は1990年) 3-4頁

² 自然観の歴史概略と聖書の自然観の特色については、拙稿「自然科学から考える原発とキリスト教」日本福音同盟神学委員会編『原発と私たちの責任 福音主義の立場から』(いのちのことば社、2013年) 40-96頁参照。

³ A.E.マクグラス (芦名定道、杉岡良彦、濱崎雅孝訳)『「自然」を神学する キリスト教自然神学の新展開』(教文館、2011年) 216-222頁。A.E.マクグラス (神代真砂実訳)『キリスト教神学入門』(教文館、2002年) 296-302頁も参照。

ーで説明する近代天文学である⁴。福音派は大方、自然神学構築の可能性を検証するよりも聖書という特別啓示に圧倒的な重きをおくことで前者を、また自然科学を敵に回してでも創世記1章の天地創造記事を字義的に解釈することで後者を回避してきた。換言するなら、自然を神の天地創造のわざ、とナイーヴに受け止める以上の自然理解を意識的に避けてきたのである⁵。

しかし、先の震災で巨大津波が東北と関東沿岸に押し寄せ、逃げる間もなく多数の人々が犠牲となる中、一般社会では「こんな残酷な自然災害を許すような神などいない」と切り捨てる無神論が幅を利かせる一方、キリスト者の間でも自然災害は罪に対する神の怒りでありさばきであるとの論調が起こった。確かに旧約聖書ではノアの洪水に代表されるような、神のさばきが自然の猛威として記録される例があり、詩篇や預言書でそれがイスラエルへのメッセージとして語られているのも事実だが⁶、果たして地球形成期の太古の時代⁷から地上に存在したはずの噴火や洪水、地震や津波などはすべて神のさばきなのか⁸。

⁴ それらを科学の対象とした際の自律性や無目的・偶然性、原初の未発達の状態から長期間のプロセスを経て完成体へと変異 (変移) していくことなどが、創世記の記述と相容れないとされる。

⁵ マクグラスは、ニュートラルな立場で自然における神認識の可能性を考察する従来の自然神学から、明確なキリスト教的視点に立って自然を捉える「自然の神学」への移行を提唱する。「それが目指すのは、神の存在のいわゆる証明ではなく、科学的知や日常的経験とキリスト教的な神理解との共鳴なのである」(マクグラス『「自然」を神学する』訳者解説、433頁)。

⁶ 樋口進「旧約聖書における自然災害」関西学院大学キリスト教と文化研究センター編、樋口進編著『自然の問題と聖典 人間の自然とのよりよい関係を求めて』(キリスト新聞社、2013年) 9-47頁参照。

⁷ 天地創造を紀元前4000年頃に設定する「若い地球論」(Young Earth Theory) では、こうした自然災害をアダム の堕落以後に発生した現象と見なすため、「太古の時代」という表現、および堕落以前の地球の造山活動や大陸移動など地球形成にかかわるプロセス理解を不適切と考える。

⁸ 中澤は、1755年のリスボン大震災をめぐる啓蒙主義者の論争を例に挙げ、当時のキリスト教界がその真摯な問題提起を無視した結果、この世と社会から乖離する結果を招いたと指摘して、自然災害は神が人間に被造物を共同管理させようと招かれた中で生じた、厳しい委託業務であると結論する。中澤啓介『自然災害をどう受け止めればよいのか——「リスボン大震災」に関する啓蒙主義者たちの論争を出発点に考える』(大野キリスト教会教育セミナー講演録、2013年)

従来の組織神学は、多少のバリエーションがあったとしても、大方は聖書を中心に据えた上で、序説、啓示論／聖書論、神論、人間論、キリスト論、聖霊論、救済論、教会論、終末論という順序と項目により構成され、各々が聖書の証拠聖句によって論証されて来た。すなわち「自然」という項目は独立してはどこにも扱われておらず、啓示論の中に「一般啓示／自然啓示」として登場するか、神論の創造のみわぎに出てくるか、あるいは救済論や終末論で、地の墮落と贖い、自然界の回復という意味で多少扱われる程度であった。

自然災害を神学的に扱い得ない問題の根っこは、このように、従来の組織神学で、「自然」（被造物世界）をどこにも適切に位置づけてこなかったところにあるのではないか。聖書こそ真理の宝庫かつ最終権威であるゆえ、まず聖書から出発して神とこの世界を理解すべきであると考えてるのが、聖書を重んじる福音派のアプローチであった。たとえば「創造」については、聖書から「神は万物の創造者である」との教理を打ち立て、関連するすべての聖句を集めて体系化し、創造の教理とする。それは決して誤りではないが、聖書とキリスト教の世界で完結しているゆえ、一般学との交流がなく、そこには神学の構築において実際の宇宙や自然界を観察し探求する必要性や意味づけの余地がないし、自然科学の営みやそこから得られた知見を聖書的に位置づける道筋もない。

加えて、従来の福音派における教理では、自分たちの生きる世界を客観的に理解するよりも、それを「この世」として否定的に捉え、世と罪からの救いという霊的領域の解決のみを聖書に求め、聖書を「天国行きの切符」と化してきたのが現実であろう。結果としてそれは神学以外の諸学（自然科学、社会学、経済学、文学、芸術などの文化活動）を軽視することにつながり、自然界の精巧さや神秘はすべて「偉大なる神の創造のみわぎ」として括られ、特に科学と歴史の分野において一般学と聖書との不一致が見受けられるケースでは、聖書を優先し一般学を無視する方法論がまかり通ってきた⁹。これは聖書の本来的性

⁹ ラムルーは、ある大学が催した科学と宗教に関する公開講座で、「恐竜について聖書はどう扱っているのですか」という高校生の素朴な質問に対し、講師を務めた著名な反進化論の教授が声を荒げて、「それは不適切な質問だ、今夜の私の講演と無関係だから問題にならない」と叱りつけ、会場全体が凍りついて質問者の高校生が退場、ラムルーが席を立ち、追いかけて、震える高校生を慰めたエピソード

格を無視した、聖書の規範性と権威性に対する誤った理解と、一般の学問従事者に対する不誠実な態度とも言い得るのではないか。「すべての科学的な営みは時代の産物です。科学における今日の標準理論が明日も変わらない、という保証はありません。にもかかわらず、その時その時の最先端の情報に基づいたベストの理解です。神より管理を託されたキリスト者としては、とりあえずすべての科学的な成果をそのまま受け入れ、その科学を利用する以外にありません。真理追究の学問的世界においては、その学問の自律性を認めねばなりません。キリスト者、非キリスト者の区別をする必要はほとんどありません。キリスト者がそのような世界に立ち入り、護教的な立場から発言することは避けるべきです」¹⁰。

神のかたちである人間は、主イエスの十字架と復活によって罪から贖われ、被造物を統治／管理する権限と使命を回復させられた。だから、統治／管理する対象としての被造物、自然界を最新の学問的成果に基づいて知ることがなければ、委ねられた使命を真摯に果たすことはできない。自然災害そのものに神のさばきの要素はなく、人間がそれを治めきれずに被害が及ぶ時、あるいは人間の傲慢さゆえに自然の力を甘く見積もり、圧倒されて犠牲が発生する時、はじめてそれが人間にとって災害となる。これを人間の自己過信や傲慢さに対する神のさばきとしての災害と見なすことも出来よう¹¹。

2. 「贖い」理解と地を統治する人間の務め

「贖い」という神学用語は、「買い戻し」の原意を持つ一般用語から宗教用語へと派生し、罪の束縛からの解放、神に敵対している者を本来の持ち主である神が買い戻すこと、罪による墮落や汚損からの回復、秩序が壊れた地の終末的再創造を意味するようになった、旧新約聖書に一貫する中心思想である。それ

を紹介している。Denis O. Lamoureux, *I Love Jesus & I Accept Evolution* (Eugene, OR: Wipf and Stock Publishers, 2009), p.xv.

¹⁰ 中澤啓介「認知的不協和から解放されるのか」『聞きたかった、隠されていた聖書の奥義』（大野キリスト教会修養会収録、2013年）3頁

¹¹ 道徳的悪と自然悪の区別については、マイケル・ロダール（大頭真一訳）『神の物語』（日本聖化協力会出版委員会、2011年）75-77頁

は「魂の霊的救い」に特化される用語ではなく、世界の贖い、宇宙の贖い、からだの贖いをも包含することばで、創造から新天新地の再創造へと向かう歴史の進展、神がアブラハムと結んだ契約の流れとも密接に関係している。「神は、墮落した被造物を廃棄したり、破壊したりするのではなく、ご自身の栄光のために豊かな寛容をもって忍耐し、それらを贖うことを選ばれました。贖うというのは、背を向けて敵対しているものを、ご自身のもとに買い戻す、ということです。その贖いは、ただ単に個人を救うということだけでなく、すべての被造物世界、世界の歴史のすべてを包み込み、そこに新しい贖われた共同体を創造する、という展望においてなされます。…地は、神の贖いの目的において忘れられていません。贖いは、人間と土地にかかわるものです(創世記 13:15、17:8)。…イエス・キリストにおける新しい契約においては、アブラハムとの契約において示された約束の地は、究極的な贖いの完成のときに訪れる新天新地を指し示します。このことは、新天新地に向かって旅をする贖われた民が、贖いの完成を待ち望む今のこのとき、この地に誠実に住むように促します」¹²。すなわち、贖いという聖書の思想において、罪とその支配から贖い出されたキリスト者が、贖いの進展のただ中にある自然やこの世界の営みに積極的にかかわり、参与して、その実を新天新地に持ち込む姿勢が期待されているということである。それは、魂もからだも土地も世界も贖われるとの包括的福音に生きる我々が、全人格的救いを宣べ伝え、この世のわざに参与して社会的責任を果たし、被造物を統治／管理する文化命令に生きるとの包括的宣教に携わるという包括的務めを主から委ねられ、期待されているということであろう。

3. 創世記1章～3章の解釈学的可能性

神のかたちとしてこの地を統治／管理するよう召された我々人間は、まずこの地および自分自身を知るところから始めなければならない。聖書にその答えを求めるなら、最初に開くのは創世記1章～3章の創造と墮落の記事であろう。従来、この天地創造記事の解釈は、若い地球説、古い地球説、インテリジェント・デザイン(ID)説、有神論的進化説(進化論的創造説)などに分けられ、

¹² 後藤敏夫、前掲書、22-23頁。中澤啓介、前掲書、3頁も参照。

キリスト教と科学の関係性の問題も含め、各々がその妥当性を主張して来た¹³。近年、古生物学における化石記録の研究成果に加え、分子生物学によるヒトゲノム(人間のDNA)研究の急速な進歩によって、現世人類(ホモ・サピエンス)が約15万年前のアフリカ起源であると推定され¹⁴、キリスト教界でも一般の自然科学に価値を見いだすグループにおいては、創世記に記録された創造記事の意図や解釈とともに、最初の人アダムの歴史性の問題が浮上してきた¹⁵。これは人が「神のかたち」として他の生き物と区別されたのは、いつどのようにしてなのか、原罪はどのように始まり次世代へ伝達されたのかなど、根本教理に直接かわる、きわめて重要なテーマである。

ホイートン大学の旧約学教授ジョン・ウォルトンは、著書『創世記1章の失

¹³ 若い地球説(Young Earth Creationism)は創世記の字義的解釈に基づく六日間創造と洪水地質学に立つ創造科学で、進化論や近代天文学、一般科学とは距離を置き、米国民の約半数が支持している。古い地球説(Old Earth Creationism, Progressive Creationism)は日一時代説(長期間説)で、小進化を認めて自然科学や天文学との調和を意識しており、天文学者ヒュー・ロスや組織神学者ミラード・エリクソンが支持している。インテリジェント・デザイン(Intelligent Design, ID、知的設計)説は、神という名称を用いない創造論として、福音派に属するジョージ・W・ブッシュ米国前大統領が支持したことで知られ、マイケル・ペーエ(長野敬・野村尚子訳)『ダーウィンのブラックボックス 生命像への新しい挑戦』(青土社、1998年)は有名。有神論的進化説(Theistic Evolution, Evolutionary Creation)は、『ゲノムと聖書 科学者、＜神＞について考える』(中村昇・中村佐知訳、NTT出版、2008年)の著者で遺伝学者&医師のフランシス・コリンズが創設したバイオロゴス財団(BioLogos Foundation)の立場。ティム・ケラー、ブルース・ウォルトキー、N.T.ライト、フィリップ・ヤンシーなど福音派指導者らが名を連ね、日本では『進化をめぐる科学と信仰——創造科学を考えなおすわけ——』(すぐ書房、2001年)の著者、大谷順彦(経済学者、現・志学会会長)が知られる。

¹⁴ ピーター・アトキンス(斉藤隆央訳)『ガリレオの指 現代科学を動かす10大理論』(早川書房、2004年)、56頁。なお、米国における創造論との対立を踏まえた上で、比較的冷静かつ客観的に進化論の全容を豊富なデータで解説した最近の書として、以下を参照。ジェリー・A・コイン『進化のなぜを解明する』(日経BP社、2010年)

¹⁵ Denis O. Lamoureux, John H. Walton, C. John Collins, William D. Barrick, *Four Views on The Historical Adam* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 2013)参照。